

京鹿子

第 10 卷 第 12 号
1991 年 12 月 15 日 发行
1000 册 (定 1200 元)



12月号

鈴鹿呂仁

拾掬集 その三十九



鬼胡桃がき大将に夢ふたつ
木洩れ日を抱く風の黙そぞろ寒
秒針の身に入む音や星の夜
産土の神の旅立ち母ごころ
鬼の子の半畳の空會津墓
鵲猛る語り部の無き過疎の村



牛膝狙はれやすき言葉じり

七五三夫三度目の一張羅

塾通ひ釣瓶落しの門ひらく

服部緑地公園

爪痕の果てなき緑地小鳥来る

萩闌ける延命橋の反り深し

系路忘

俳友の二十^たの魂抱く露の寺

鳥辺野の山を動かす露ひとつ

白露の七坂八坂うしろかげ



— 近 詠 —

鈴 鹿 仁



系露忌

韋駄天の雲のおもはく深む秋

ふりむけば秋蝶のゆく野の真中

秋の雲記憶のなかの影を追ふ

— 追懐 —

首縦に振るをんな佳し花すすき〔平成十二年作〕

譬ふれば実石榴の裂け遠き日を〔 〃 〕

近詠

和田 照海

艇庫

初鴨を待ちしを真開きに

鴨渡り来て吃水を高くしぬ

星近き峰里すでに冬構へ

いわし雲貸し借り今も島ぐらし

コスモスや駅には遠き縄電車



松本 鷹根

遠嶺雲

遠嶺雲稲穂なびきに真向へり

白萩の地につく祈りただ平和

陽を捌く艶の芒や翁堂

翁墓被へる柿の色付けり

てらてらと熟れる榎植や反抗期



近 詠

塩貝 朱千

浄土絵

柿熟るる古刹に遺る釣瓶井戸

庭石に奇数のけぢめ秋のこゑ

風狂の一休に逢ふ颯風あと

浄土絵のおどろおどろし曼殊沙華

待宵や尼君墨の香をまとふ

英華採集

世の中よ炎帝いよよ手放しに

青 梅 金子 野生

今年の夏は大変な猛暑であった。気温が三十度を超えると猛暑日と言うが、三十五度超えの日々が続くときさすがに身体に影響が出る。炎帝もさぞかし多忙の毎日を過ごしたに違いないが、炎帝自身もうんざりとしたことだろう。この猛暑は、人間に対するある種の警告であり、上五の「世の中よ」の呼びかけは、実に効果的である。天に見限られないように我々は戒めにしなければならぬ。

赤とんぼ寡黙な町のかゝ拾ふ

枚 方 小川 すみれ

一般的に過疎となると村や里をイメージするが、集落のある場所からやや開けた町を思い浮かべる。都会へは、離れた町にも過疎が広がっているのだろうか？今年も時期が訪れて赤とんぼが群れ始めているもの町は寡黙のままである。何処かに声が聞こえてこないかと、赤とんぼが声を拾うために頻りに窺っている。寂寥感が濃く滲み出ている作品である。

空打ちの鋏の間合ひ松手入

京 都 吉田 悌子

造園業者の職人、それも師弟関係の二人が黙々と松の手入れをしている。特別に打ち合わせをしているわけではないが、空打ちの鋏の音がリズムよく聞こえてくる。正に、阿吽の呼吸というやつである。本当は、非常に小さな音に違いないが、心地よく響くのは澄み切った青空の一日だからであろう。鋏の音と言い天気のことと言い省略を効かせたことにより佳句となった。

神麓集

式部の実 藤岡紫水

明日香路に夢拾ひけり式部の実
山は照り峠は翳る初時雨
縹渺と星相寄りて冬に入る
玻璃の陽に十一月の虫浮ぶ
注連古りて社頭侘しき神無月

冬紅葉 沼田巴字

耐へてゐる想ひふかぶか枇杷の花
賀茂川に立つ僧形や冬初め
石路の花ふつくら咲いて母忌日
潜るとき祈りありけりかいつぶり
もう何もなくすものなし冬紅葉

冬便り 丸井巴水

聖歌隊止める夜空の赤信号
薬袋の一つ荷となる神の留守
三水編消えたをとこの冬ごもり
保育所の窓を覗きて散る銀杏
オムレツの小高き島に冬便り

年新た 植村蘇星

京鹿子風雅脈々年新た
これやこの天守焔々初日の出
大天守出城山城初山河
戒めと読みし運勢初詣
身に余る米寿を祝ぐす初明り

神麓集

秋の虹 北川孝子

秋の虹少年風となり走る
刻々と色変ふ山は秋深み
木の実落つ音にふり向く日和かな
身にそひし夢はぐくみて歩む秋
未来より長き過去もち秋深む

百日紅 直江裕子

ががんぼの泛いてゐるのか憂いてゐるのか
先の先かかへる微熱さるすべり
炎天の自虐燃えないゴミ分ける
同じ字を辞書で二度引く酷暑かな
記憶みな風となるまで遠花火

私心なし 高木晶子

一善の始め噴井に手を浸す
自愛かな蛇足ながらの胡瓜もみ
あの時代忘れぬ墓石灼熱す
法師蟬天動説を唱へをり
月見草群れ咲き私心何もなし

婚日和 伊藤希眸

鶏頭花列組み何に手向かふや
陽に重き庭にあまたの新松子
藍染めの秋麗といふ立ち姿
婚日和うれし淋しく落葉踏む
なにかあるな萩百株と神の水

神麓集

霧句ふ

井上菜摘子

山彦のひとつ躓く秋の山
月夜茸一世ををどりつくさねば
コンサイスにのこる旧姓霧句ふ
別れの傘君からひらく夕木槿
ふしあはせでもなく秋の金魚飼ふ

聖夜星

村田あを衣

二百十日突支ひ棒をさがしをり
虫すだく眉目かげらす阿修羅像
本籍を移せし便り花野より
月光は母へ逢ひゆく道標
まぎれなく吾への指針聖夜星





京鹿子集

鈴鹿呂仁選

京田辺 山中志津子

二上に挽歌のやうな秋の虹
二百十日自分探しの旅果てず

城陽 鷺山 珀眉

水源の湖畔のホテル晩夏光

精霊送り私の過去を誰も問はず

大花火地球の綻び増やしをり

水差に秋が来てゐる写経の間

風音はや初秋を刻む竹小径

虫今宵どこ探しても母がゐない

厄日過ぎ曆に印す小さきマル

ネコバスを待つ虫の闇抜けて来て

京都 井尻 妙子

いしづみの影は翳へと野分あと

秋の虹いつも遠くにゐるひとり

蓮の実とぶ水の余白に梵字置く

シャイにしてこの木洩れ日のさはやかさ

なにはさておき青すだち搾りをり

水音がそこだけ消えて吾亦紅

ヴイオロンに貫かれたり秋の午後

小鳥来る鏡の奥をねぐらとし

花すすき湖あをあをと暮れゆけり

碧い目のとんぼに出逢ふ日曜日

京都 片山 熙子

三伏を無欲に息をしてゐたり

福 山 亀井 福恵

万雷の蟬の中なる戻り橋

酔を打つて腕の自在に祭鯨

腕ぢから未だ健在生身魂

落款は赤唐がらしほまち畑

遠吠の二百十日の虚空かな

片足は天の岩戸や秋の虹

平成の隙間を台風よく通る

余生とはときに胸うつ秋風鈴

大江山絶景なるや稲穂波



世の中よ炎帝いよよ手放しに

いつまでも尖つてをれずかき氷

枝豆や郷土(おくに)言葉の与太話

二足す二と二掛ける二とさくらんぼ

赤とんぼ寡黙な町のご糸拾ふ

あと一と日残す別離よ秋の蟬

枚 方 小川すみれ

青 梅 金子 野生

さはさはと木々の上枝や涼新た

虫の音の透く夜囁みしむ今日一日

空打ちの鋏の間合ひ松手入

野分あと我が表札はポストへと

お捻りは安堵の包み村芝居

字余りを響かす一字鉦叩

盆の月繋ぐ思ひ出友と囲碁

詰襟の僕ら二列目鰯雲

花みずき我が祖父母まだ慕ふ人

若人を迎ふ空港喜雨の午後

稔栗の落ちてる先や山の墓

大風の無事通り過ぎ刈屋梨

蜻蛉右猫は左の昼下がり

秋出水又も警報最上川

天皇のお言葉重し終戦日

酷暑なり路地の隅まで乾き切り

外国の友もメールにこの猛暑

酷暑なる朝のグランド子等サツカー

信長のなぜ討たれしか桔梗花

新涼のさらりと通る勝手口

隔週の行事となるや台風来
豊漁のピカピカ光る秋刀魚買ふ

京 都 吉田 梯子

アリソナ 伊吹 之博

酒 田 藤波 松山

さいたま 神田 惣介

戸 田 遠山 悟史